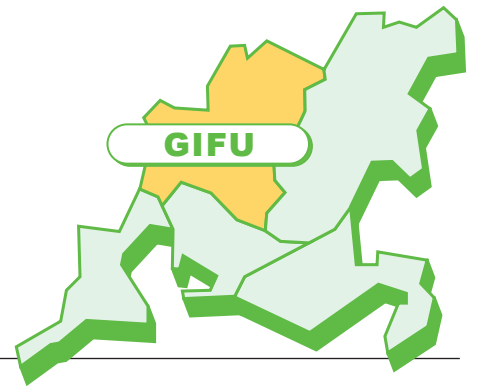


中部 だより



中経連事務局員が、担当するエリアでお聴きした、各県の最新トピックや地域特有の情報を紹介するコーナーです。

飛騨御嶽高原高地トレーニングエリア 2020年東京五輪に向け世界も注目

岐阜県が2014年度に始動した「清流の国ぎふ2020プロジェクト」では、2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催、東海環状自動車道の全線開通を見据え、スポーツの振興、観光誘客、産業の振興を3本柱に取り組んでいる。その中で、スポーツ振興の目玉となる施設が、高山・下呂両市にまたがる「飛騨御嶽高原高地トレーニングエリア」である。

飛騨御嶽高原高地トレーニングエリア



同エリアは、御嶽山の周辺、高地トレーニングに適した標高1,200mから2,200mのエリアに位置している。オケジッタ日和田高原ゾーン、濁河温泉ゾーンなど4つのゾーンで構成され、全天候型400mトラック、クロスカントリーコース等の充実した練習施設に加え、12カ所・約700名収容可能な宿泊施設がある。

エリアの拠点施設が、飛騨高山御嶽トレーニングセンターであり、医科学トレーニング機器や低酸素室等、先端科学を活用したトレーニング設備が完備されている。

同エリアの整備は、1997年に地元3村長（旧小坂村、朝日村、高根村）から県に対し、「高地トレーニングの整備に関する要望」があったことを端緒としている。2000年ごろから、実業団チーム等による利用が始まり、現在では、県・市による環境整備や、合宿チームの受け入れが進められている。文部科学省がナショナルトレーニングセンター拠点施設として指定しており、昨年には257団体・約24,000人が利用した。

国際的なトレーニングエリアへ

同エリアは国際的にも知名度を高めつつある。今年8月に北京で行われた世界陸上選手権を前に、7月末から順次、英国、米国等4チームの選手・スタッフ29名が同エリアに入り、事前合宿を行った。この中には、5,000m、10,000mで世界陸上2連覇を達成した、英国のモハメド・ファラー選手も含まれていた。

2020年東京五輪に向けて

岐阜県では、同エリアが高地トレーニングのメッカとして、世界中に認知されるように、取り組みを強めている。既に、英国、米国、仏国、豪州が同エリアの視察に訪れており、他にも関心を寄せている国が少なくない。中でも英国と岐阜県は事前合宿に関する包括協定の締結に合意している。

古田知事も、同エリアを国内外にアピールしていきたいと抱負を述べており、県として、国内外トップアスリートの合宿や、大会・イベントの誘致に向けた支援措置なども用意している。

また県は、地域との交流や、次代の育成にも力を入れており、今年の8月2日には、英国チームが、同エリア内2カ所で地元の小中学生約100名を対象にした「陸上教室」を開くなど、トップレベルのアスリートと触れあう交流も行われた。

中経連としても同エリアの今後について、地方創生の中で交流人口の増加や国際交流の拡大につながる取り組みとして、引き続き注目していきたい。

（岐阜担当 馬場 誠治）

取材協力・写真提供：岐阜県 清流の国推進部 地域スポーツ課